



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「孫悟空が生まれた国」⑥

わが輩が広州駅に着いたとき、すでに夜の7時30分で暗くなっていた。
さて何処に泊まろうか。流花賓館 (Liu Hau Hotel) に泊まる予定であったが、それがどのあたりにあるのか地理感覚がなかった。駅広場を見ると、人力車があるではないか。

インドでは、どこに行ってもリキシャがあった。近距離移動に適した乗り物である。
ところが、いつも乗り賃のことでロゲンカになった。

「ベナレスのカンジス河ガートまでいくら？」

まず行先をつけて値段の交渉をする。

「ダンナ、100 ルピーだよ」

外国人だと思って高額をふっかけてくる。他のリキシャ・マンと交渉し始めると、

「ダンナ、50 ルピーでいいよ。乗れ！」

途端に値段を下げてくる。

ガートに着くと、「ダンナ、100 ルピーだよ」と前言を翻す。あきれて結局60 ルピーを払うはめになったことなど度々あった。

泥棒や嘘をつかない（という）共産主義国の中国はどうか。

「流花賓館までいくら？」

中国の車夫は正直そうに答えた。

「ダンナさま、2元 (¥270) でございます」

リキシャに乗って100メートルほど行ったら降ろされた。目の前に流花賓館があった。

深圳/広州までの中国人運賃は2元60角である。

「やられた！」と思ったが後の祭り。

やっぱり、だますヤツがいるんだ、と妙な安心感につつまれた。

(だまされると安心できるという、絶対矛盾の自己同一)

流花賓館で、外国人旅行証とパスポートを提示してチック・インを済ませると、三人部屋に案内された。中国人二人がすでに宿泊していた。宿泊代一人9元 (¥1,215) で、一部屋27元であった。疲れていたのもその晩はぐっすり眠り込んだが、貴重品は身につけていた。翌朝 (5月1日) 二人がチェック・アウトをしたので一人部屋になった。それで、フロントに行って鍵を借りようとしたが、

泥棒がないので「鍵そのものがない」と言われた。

(そんなこと信用しないぞ！)

部屋にいと、警官がやってきた。外国人なのでチェックに来たようである。白の制服に襟には一つ☆の紋章をつけていたので下級警官であろう。言葉が通じないので、簡単な遣り取りであったが、「ひと眠りさせて」と仮眠しはじめたのには驚いた。なんとなくユーモラスな寝顔に親しみを感じた。

まず、郵便局に行って航空書簡を求めたが、無いといわれた。

(エアログラムの発音が通じなかったのか・・・)

次に中国民航にいき予約状況を聞いたら広州/桂林の空席があるとのことで、夜6時の便の航空券(60元=¥8,100)を購入した。ちなみに中国人が汽車で桂林へ行くと30元と言われた。

折角なので越秀公園、中山記念堂、市政府、人民公園、などを巡って、ホテルに戻り昼食を食べた。

中山記念堂は、革命家孫文を記念して華僑の寄付で建てられた。孫文は日本に亡命してきたこともある。孫文は「大アジア主義」を掲げて、アジア人が団結して欧米と対抗することを呼びかけた。欧米が物質主義、武力主義であるのに対して、アジア文化は精神的道徳的だとしている。

当時はアジア VS 欧米であったが、今では中国 VS 米国になってしまった。いや、中国 VS アジアになってしまった。それどころか物質主義、武力主義が中国の看板になってしまった。

中山記念堂に立つ孫文の像は嘆いているだろうか。

中国の道徳というと「恩義」ということが言われる。国の恩、師の恩、親の恩などというが、一体「恩」とは何であろうか。国語辞典によると「めぐみ」「なさけ」とある。これを丁寧語でいうと「おめぐみ」「おなさけ」となる。相手から頂くもの、ということになる。頂いたものは、返さなければならぬ、と強く思うのが中国の恩である。

たとえば中国製のワクチンを頂いたなら、いつかその見返りをしなければならない。しなければ、恩知らずということになる。本来はギブ&テイクで、一本のワクチンをもらえば、一枚の金貨を返せばよいはずである。ところが、一本のワクチンで三枚の金貨を返すように仕向けるのが現代中国の道徳である。

インドはどうか。インド製のワクチンは、誰のものでもない。神さまのものだ。この世に私が所有するものは何もない。だから一枚の金貨さえも期待してはいけない。(出来る出来ないは別にして)この考えがあるかぎりインドは不滅だ。

タンザニアはどうか。前述の『チョンキン・マンションのボスは知っている』の著者小川さやか氏の解説から見てみよう。

「タンザニアの商人たちは、仲間が病気や事故など何らかの困難に陥ると、カンパ帳を回しあう習慣がある。ただ、商人たちは、集まった支援が解決に満たなかったり、別の困難が降りかかったりすると、当初の目的とは異なるものにカンパを使うことがよくある」

結構いい加減なところがあるが、「あげた金は本人のもの」で、中国のように恩を返せと言っているのではない。あげた金にとやかく言うのは「かっこ悪い」ことらしい。人さまを助けるのに、契約や条件は「かっこ悪い」ことなのだ。

助ける方も助けられる方も、実に気が楽なのである。このいい加減さこそ、「中国自大アジア主義」にはない、本来の「小アジア主義」というものではないだろうか。